

自閉症の子どもの理解と支援のあり方 ～生活単元学習を通してコミュニケーション能力を育む工夫～

那覇市立与儀小学校教諭 宮平 幸子

テーマ設定理由

今、障害のある人も、障害のない人も等しく社会の一員として社会的活動に参加し、自立した生活が実現される社会（ノーマライゼーション）の理念を基礎に、障害のある児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う「特別支援教育」への転換が図られている。これまで特殊教育の対象でなかった通常学級にいるLDやADHD、高機能自閉症等の存在が顕在化する中、教育的対応の在り方が大きな課題となっている。

沖縄県教育委員会では、「沖縄県における特別支援教育体制整備の基本方針」を公表し、その取り組みを進めている。5つの基本方針の中の一つに、「通常の学級に在籍するLD等の児童生徒への対応と特殊学級等の充実」を挙げ、専門家チームの設置と巡回相談アドバイザーの配置、特別支援教育コーディネーターの指名と養成研修の実施等を推進している。

那覇市の学習障害児童生徒への支援は二通りあり、一つは学習障害児等専門家チームによる学習障害巡回相談、二つめは、これまで「きこえとことば」のみの対象であった「通級学級」が「LD等」も対象になり、2006年現在、33人中6名がLD等である。また、認定就学制度も2003年から実施されており、現在20人の認定就学児童がいる。

自閉症の子を理解し支援していく上で大切なことは、その子の実態をよく把握し、環境を整えてあげることや見通しを持った学習計画を立てることである。自閉症の子の大きな特徴の一つにコミュニケーションの困難があげられる。

本学級の児童は、運動場の端から端まで走り回る元気いっぱいの2年生の男の子である。コミュニケーションに関しては、自らの発語が乏しく、ことばの理解や指示への対応も不十分である。しかし、健常児とのふれあいの中でいろいろな刺激を受け、言葉を発する場面が出てきている。自閉症の子が交流学級で学習する時や、友だちと仲良くするためには、相手の言うことが分かり、自分の思いや気持ちを伝えられるコミュニケーション能力はとても重要であると考え、コミュニケーション能力を高めるにはどんな支援が必要なのか、具体的な手だてを研究しようと思い、本研究テーマを設定した。

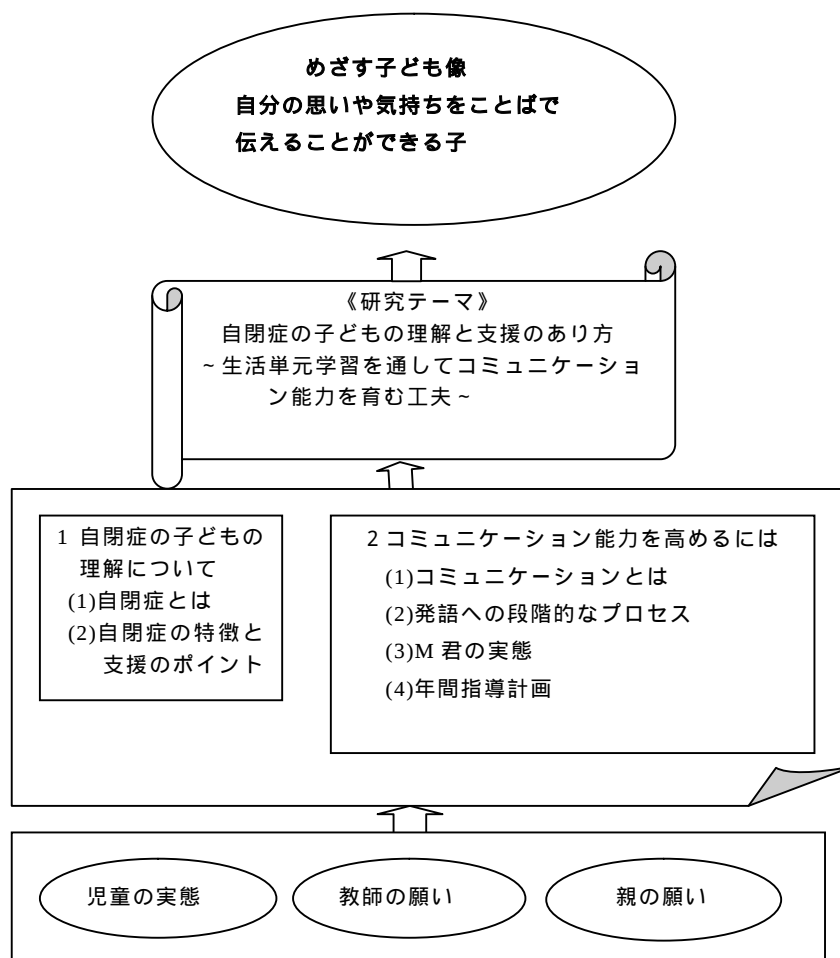
研究目標

自閉症の子をよく理解し、支援のあり方を考え、子どもが自ら関わり、持続して取り組めるような学習方法を工夫し、コミュニケーション能力を高めるための段階的な指導方法を研究する。

研究方針

- 1 自閉症の子どもの理解や、支援の仕方についての理論研究。
- 2 コミュニケーション能力を高めるための具体的な学習活動の工夫について研究する。

研究構想図



研究内容

1 自閉症の子どもの理解について

(1) 自閉症とは

(杉山)によると、1970年代以後、自閉症が発達障害であることがはっきりしてくると、自閉症は非常にまれな単独の疾患というよりも、様々な基礎障害と多彩な症状を持つ症候群であることが明らかになった。

広汎性発達障害は自閉症スペクトラムとも呼ばれ、自閉症と同質の、生来の社会性の障害を中心とする発達障害の総称である。

広汎性発達障害と言う呼称の意味は、このグループが社会性の障害、言葉の遅れ、こだわり行動、知覚の異常、不器用など、広汎な領域の発達障害を併せ持つからである。自閉症とは、社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害とそれに基づくこだわり行動の三者を、生まれつき持つグループである。三つの特徴を有する自閉症のうち、知的遅れがないものを高機能自閉症といい、自閉症の範囲で知的な発達やことばの発達に遅れがないのがアスペルガー症候群である。アスペルガー症候群は、ことばの遅れはないが、ことばの意味の理解やコミュニケーションが苦手で、社会性に困難がみられる。

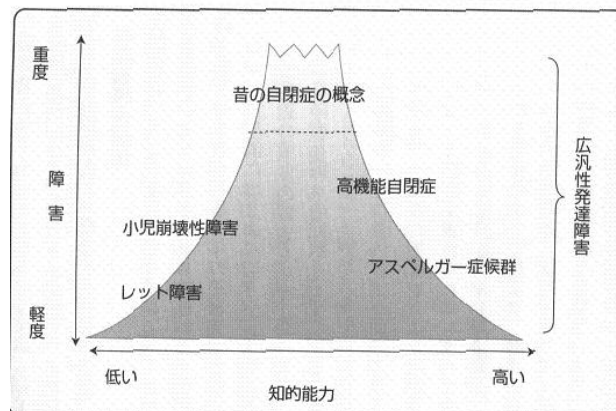


図1 広汎性発達障害の概念

(2) 自閉症の特徴と支援のポイント (「自閉症児の特別支援Q&Aマニュアル」東京書籍より引用)

	特 徴	支援のポイント
人とのかわりの困難	・発達や年齢に相応した非言語的コミュニケーションが使えない。 ・目と目で見つめ合うこと(アイコンタクト)、顔の表情をつくること、体の姿勢や、身振りなどの困難がある。 ・発達や年齢に相応した仲間関係を作ることの困難がある。 ・楽しみ、興味、達成感を他人と分かち合うことや、自発的に他者と共有することが難しい。 ・集団で遊んだりゲームなどに参加することよりも一人遊びを好む。	・強引に他の子どもと接触させることをさける。 ・関わろうとする人の方で徐々に接近したり、接触するように配慮する必要がある。 ・本人が拒否した場合は、決して無理強いはいしない。 ・本人の好みのおもちゃや活動を通して、大人や少人数の子どもと関わらせていく。 ・加齢とともにしだいに交友関係に関心を示すが、人とかわる際に必要なコミュニケーション技法や身振り動作やジェスチャーなどを学習させる。 ・本人が好んだり、生活上必然性のある活動や遊びの機会を利用して、自ら進んでコミュニケーションがとれるような雰囲気を作っていく。その中で、適切な行動を模索したり、実行させるような指導をしていく。
コミュニケーションの困難	・話し言葉の発達の遅れがある。話し言葉を補うために、身振りやジェスチャーなどの非言語的コミュニケーション手段を使わない。 ・音程、抑揚、速さ、リズム、あるいはアクセントにぎこちなさや異常がみられる。 ・文法的構造の発達に遅れが見られ、特定の単語やフレーズを繰り返したり、同じテーマや内容にこだわる。 ・個人的で独特な言葉を用いることがある。 ・言語理解が遅れたり、単純な質問や指示を理解することができない。 ・同じ言葉でも状況によって意味が異なることが理解できない。	・発語や発話技能の形成を目標とする一方で、すでに獲得されている子どものコミュニケーション技能に応じて、現実的な目標を設定する。 ・コミュニケーション技能の獲得状況には個人差が大きいので、本人の技能の獲得レベルに合わせて、コミュニケーション技能の形態を選択することが重要である。(例えば、絵カードや文字カード、コミュニケーション・ボードなど)。 ・要求場面や、やりとり遊びの場面などでは身振りや動作で表現するための指導が必要である。 ・自傷行為、他者への攻撃行動、かんしゃく行動等によって、コミュニケーションをとろうとする者には、不適切な行動を持続させている要因を早急に突き止め、本人の技能のレベルに見合った適切なコミュニケーション技能を指導し、不適切なコミュニケーション技能の代替にする必要がある。 ・発声や発語に異常が見られるときは、言語指導で問題を解決しようとせず、本人の発達段階を認め、本人なりの方法で他者とコミュニケーションが取れるようにする。
興味や関心の狭さやこだわり 反復的常同的な行動	・物事に対する、興味や関心がたいへん狭い。 ・日付、電話番号、時刻表、商標などの限られた物に異常なほどに興味を持続ける。 ・小さな環境の変化に対して、かんしゃくを起こしたり、混乱してパニックに陥ってしまう。 ・手や指をばたばたさせたり、ねじ曲げる、または複雑な全身の動き(ひもを振り続ける)などを、回りの状況に関係なく行う。 ・ばたんや体の一部分に対して持続的に熱中したり、動く物に対して強い興味を示す(扇風機や換気扇、ドアの開閉)	・常同行動や自己刺激行動は、本人の精神的な安定のために重要な役割を果たしていることもある。 ・本人に分かりやすいスケジュールや、納得できる交換条件を提示してルールとして取り決め、徐々に定着させるようにする。 ・常同行動や自己刺激行動が急に増える場合には、原因や持続させている要因を突き止め、不安や不満を取り除くための工夫と努力が必要となる。 ・急な予定の変更などがあると、不安になって常同行動や自己刺激行動を行う者もいる。このような場合には、本人に見通しをもつことが可能なような生活上の手がかりを与え、日頃の生活上の配慮を行うことで、このような行動が頻発するのを避けることができる。

2 コミュニケーション能力を高めるには

(1) コミュニケーションとは

子どもは生まれてから一年の間に養育者といろいろなやりとりを経験し、声のやりとり、微笑のやりとり、視線のやりとり、身振りや指さしなどを通して、コミュニケーションの基本的な能力を身につけていく。1歳頃にことばを獲得し、2歳前には語彙が急増し、二語文が使えるようになる。この時期に「ことば」が身近な人間とのコミュニケーションの道具となる。3歳になると言葉が認知の道具となり、互いに共通の概念理解があるから会話が成り立っていくのである。（「ことばのストレッチ体操」明治図書より）

自閉症児においては、コミュニケーションが成り立つための「ことば」の獲得はきわめて大切なことだと考える。「ことば」を話すためには物を認知し、意味を理解し、ことばを自分のものとしなければならない。ことばには 人とコミュニケーションをするための道具、 外界や自分を認知するための道具、 考えるための道具、 行動を調整するための道具として4つの機能を上げている。そして、コミュニケーションが成り立つためには、コミュニケーションに向かう・聞く・やりとり・役割交代が重要であると述べている。

（図2）

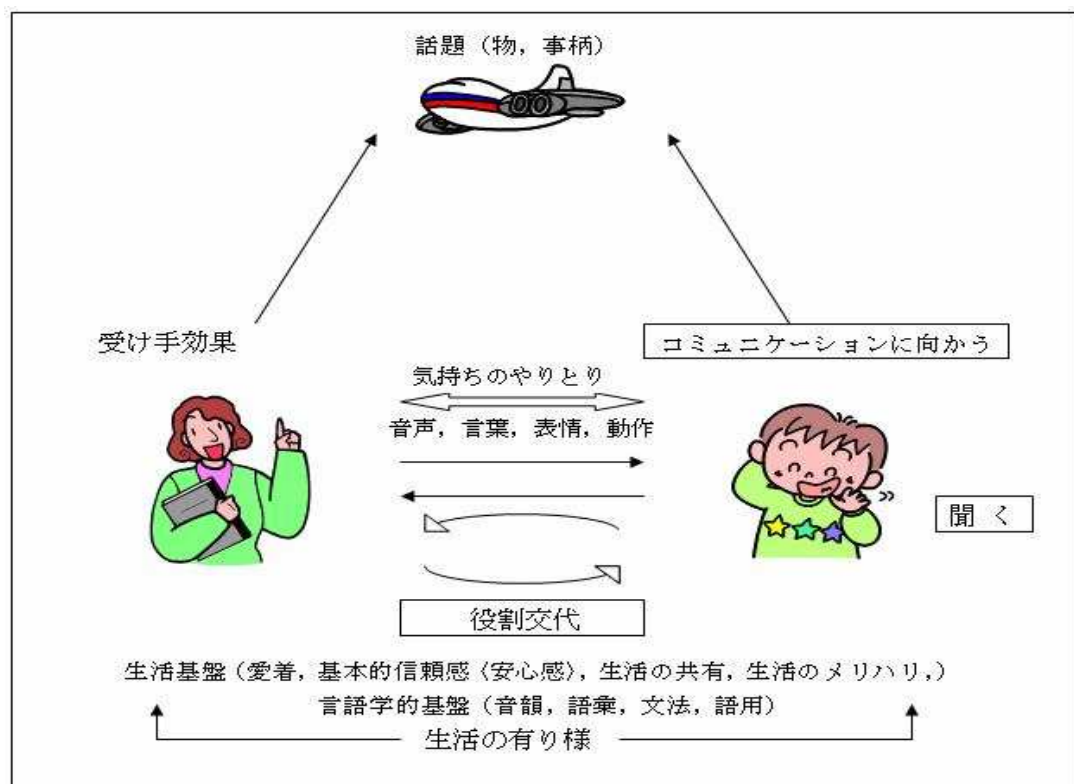


図2 コミュニケーションの図式化

(2) コミュニケーションへとつながる発語への段階的なプロセス

「自閉症児の発語プログラム」(石井聖著)によると、発語に向けてのまず最初の大きな目標は、「物には名前があること」への気づきとしている。発語プログラムの道筋として33のステップをあげている。表1は発語プログラムの道筋としての課題とステップである。

本学級の児童はステップ12の「聴覚語の獲得」の段階と思われる。五十音の法則性に

おぼろげながら気づきはじめており，文字を書く時に内発音が加わるようになってくる。そこで，ステップ 12 と 13 の指導の手だてを詳しく取り上げてみた。

表 1 課題とステップ

段階	ステップ	課題
無シンボル期	1	同型マッチング
	2	動作模写
	3	定位模写
	4	異型マッチング
	5	書字 1 枚から書き分け 2 ～ 3 枚
	6	
視覚語期	7	書字枚数を増やす
	8	模写の意味がわかる
	9	初めて聴覚刺激を加える
	10	口型模倣
	11	内発音の獲得
聴覚言語期	12	聴覚語の獲得
	13	聞き取り・聞き書き
	14	カード（文字）＋口形＋音声模倣
	15	音声模倣
	16	自習ができる（書字 100 枚）
	17	数
	18	動作語の書字
	19	属性の書字（色＋物＋数）
受動的発語期	20	絵カードを見て発語
	21	文字カードを見て発語
	22	言葉の模倣
	23	動作語模倣
	24	いろいろな人の声と自分の音声のマッチング
	25	発音矯正
	26	判断学習
	27	関係概念
	28	文章題
	29	音読
自発的発語期	30	自発語の誕生
	31	会話パターン
	32	歌を歌う
	33	絵日記を書く

ステップ 12 聴覚語の獲得

カードマッチングや書字学習において，視覚ルートと運動ルートの接続が確実に became と感じたら，手本の提示時に音声刺激（聴覚ルート）をつけるようにする。絵カードを提示しながら発せられる先生の音声で，文字と結びつくことではっきり音に気がつく。相手の音声を聞く＝聴覚ルートの開通である。

ステップ 13 は聞き取り・聞き書きである。この時期の課題は

絵カードの聞き取り・並べられた絵カード（3～5 枚並べて）の中から，先生が言ったものを取り出して先生に渡す。

文字カードの聞き取り・並べられた単語カード（書字や絵と字のマッチングで使っているもの）の中から，先生が言ったものを取り出して先生に渡す。

本児はバナナやアイスクリーム，カタカナで書かれた国名などが取れた。聞き書き・絵カードも文字カードも見せないで，先生が言った音声だけをたよりに単語を書く。

イラスト書字・書字カードの絵でなくて紙にお母さんが直接書いた絵を見て，正しく書字（絵を見て字を書くことを書字と言う）ができる。イラスト書字は書字カードとそっくりの絵ではなくても，書けるように練習する。違う絵のカードでも，共通の音声があるので，このような学習が可能となってくる。

(3) M君のコミュニケーションの実態

発語について（学校）

- ・ 自発的に話をすることは難しい。
- ・ 名前を呼ばれたら，たまに返事をする。
- ・ 朝や帰りの挨拶は，教師の声かけでできる。
- ・ ひらがなを，読んだり書いたりできる。
- ・ 絵カードを見て名前(ナス，きのこ，ピーマン，ドラえもん，のびたくん，しんちゃん等)を答えることができる。
- ・ 水やトイレなどの要求の時は，自分から声を出す，一言で終わってしまう。
- ・ 体育や音楽で交流学級へ行かなければならない時などM君は一回の声かけで動くことは難しい。
- ・ 文字の発音チェック M君が文字を見てどの程度発音できるかをチェックしてみた。下の表は発音チェック表である。

発音チェック

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
を	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

発音チェック

		が		ざ		だ		ば	ぱ
		ぎ		じ				び	ぴ
		ぐ		ず				ぶ	ぷ
		げ		ぜ		で		べ	ぺ
		ご		ぞ		ど		ぼ	ぽ

発音チェック

ぎゃ	じゃ	びゃ	ぴゃ	りゃ	みゃ	ひゃ	にゃ	ちゃ	しゃ	きゃ
ぎゅ	じゅ	びゅ	ぴゅ	りゅ	みゅ	ひゅ	にゅ	ちゅ	しゅ	きゅ
ぎょ	じょ	びょ	ぴょ	りょ	みょ	ひょ	にょ	ちょ	しよ	きよ

太枠はM君が
発音できた文字

発音チェック のひらがなは全部発音でき，濁音はが行のみ発音することができた。
発音チェック の拗音に関しては最初から読む意思を示さず，どう読んでいいのか分からない感じが見られた。今後の指導において，「きゅうりのきゅ，きゅうきゅうし
ゃのきゅ」「かわいいねこだね，にゃ，にゅ，にょ」という様にことば遊びとして，
リズムカルに読ませていくことで関心を持たせて行きたい。

家庭での様子（アンケートから）

- ・ 声がよく出ているのは，インターネットのゲーム（ハム太郎のぬりえ，スーパーマ
リオ）などで遊んでいる時やひとりで絵を描いている時。
- ・ 漫画のキャラクターの名前（おでんくん，マリオ，ルイージ，ピーチひめ，など）
- ・ 感情表現（ダメー，危ない），心情表現（あついねえ，さむいねえ）
- ・ 家庭の中で言葉が無くて困る時は，注意をすると，注意した言葉をオウム返しにし
て話すことがある。
- ・ 怪我などをした時に説明ができなくて困る。どれくらい痛いのか，どれくらい具合

が悪いのか理解してあげることが難しい。

- ・お母さんが本児と話をする時は，本人の目を見て話すように心がけている。
- ・将来は何かひとつでも好きなことを見つけ，継続して頑張れる子になってほしい。

本児にとって，さらにコミュニケーション能力を高められたら，交流学級の子とも達と関わる時にも自分の気持ちをよりスムーズに伝えられ，これからの学校生活も楽しいものになるであろうと考える。

(4) 年間指導計画 （生活単元学習）

学期	月	題材名・ねらい	活動内容	評価
一学期	四 ～ 五月	・自己紹介・あいさつ ・絵カード合わせ ・発語プログラム ステップ1 （同型マッチング） ステップ10 （口型模倣）	自己紹介やあいさつ 2枚ずつ組になっ ているカードを並べ合 わせる。 絵カード（カボチャ， なす，つくえ，ランド セル）の名前を言う。 写真カード（保健室， トイレ，図書室，体育 館）を識別する。	・学年，クラス，名前 が言えるか ・同じカードを並べる ことができたか ・絵カードの名前が言 えたか ・写真カードをみて， 『～へいきます』が言 えたか。
	六月（検証）	・買い物ごっこをしよう ・買いたい品物を買うことができる。 ・発語プログラム ステップ13 （絵カード，文字カ ードの聞き取り）	遠足やお誕生会の買 い物をする。 品物の名前を言う。 実物や絵本（ケーキ， おすし）や文字カード （ゴーヤー，オレン ジ）から品物の名前が 書ける。 お金を払う。	・お店屋さんの品物を 準備し，名前が言え たか。 ・『～をください』『い くらですか』が言え たか。 ・パペット人形を基に スムーズに発語がで きたか。
二学期	九 ～ 十二月	・発語プログラム ステップ13 （聞き書き，イラス ト書字）	絵カードや文字カー ドを見ないで，音声だ けで単語を書く。 イラストの絵から字 を書く。	・音声だけで文字を書 くことができたか。 ・絵から文字を書くこ とができたか。
	一 ～ 三月	・発語プログラム ステップ14 （カード「文字」＋口 形＋音声模倣）	絵カードを見ながら， 先生の出した音や口 形を見て，真似をす る。	・自分の出した音と先 生の出した音が同じ であることを知る。

授業実践

1 題材名 「お誕生会の買い物をしよう」

2 ねらい

- ・買い物場面で、品物の名前が分かり、その場に応じた会話（応答）ができる。

3 授業仮説

- ・子どもが関心のあるお店屋さんの場を設定し、興味・関心を持続させ、人と関わる場面を作ることにより、コミュニケーション能力が育つであろう。

4 準備

お店屋さんで使う品物、お金(百円)、品物を入れるかご、絵カード、文字カード、ワークシート

5 本時の展開

	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評価
導 入 10 分	1. 歌を歌う ・「おはよう」の歌を歌う。 ・「はらぺこあおむし」か「アブラハムの子」どちらかを選択させる。 ・手遊び歌 「一と五でたこ焼きたべて」 ・エルモ君にきちんとあいさつができる。	・どちらかを選択させることで、自分から主体的に取り組む気持ちを持たせる。 ・一緒に身体表現をすることで、体をほぐし、リラックスさせる。 ・遊びを通して、指で数をとらえさせる。 ・お友達のエルモ君にきちんと挨拶ができるようにする。	模 倣 や 身 体 表 現 が できたか あいさつが できたか
展 開 30 分	2. この時間のめあてが分かる。 「おたんじょうかいのおかいものをしよう」 3. 場面設定「エルモ君のお誕生会のかいものをしてあげよう」 ・「お誕生会をするために、なにをかってこようかな」 ・お誕生会に使う物は何かを考えて、書くことが出来る。 ケーキ、ジュース、おかし、おすし、ピザなど 4. 買い物をしよう。	・黒板に明示することで、一時間の勉強の見通しを持たせる。 ・パペット人形と同化し、興味を持って買い物ができるようにさせる。 ・目の高さで、目をしっかり見て指示を与える ・「お誕生会の買い物」と目的を持った買い物をする事ができる。 ・お誕生会の様子(掲示資料)を見ながら、買いたい物を考え、ケーキ、ジュース、等の言葉が出るようにさせる。 ・ワークシートに書かせるが、カタカナが書けないときは、絵カードか文字カードを見て書かせる。 ・それぞれのコーナーで品物の名前を言	何を買うか 話したり書 くことがで たか。

	・ワークシートに書いたものを買うことができる。 「～をください」 「いくらですか」 ・お金をはらう	・って買うことができるようにさせる。 ・ワークシートに書いていない品物でもよしとする。 ・言葉が出ない場合は、パペットのエルモ君にヒントを出してもらう。 ・品物は全て100円とする。	
まとめ 5分	5. 買った品物の名前を言う。 6. 「ドレミの歌」を歌う	・買った分の品物の名前はきちんと伝えるようにさせる。 ・書いていない品物の名前を追加して書かせる。 ・歌でリラックスさせる。 ・がんばって買い物ができたことをほめる。	品物の名前を言うことができたか

結果と考察

検証 1

子どもが、興味、関心を示すような場を設定すれば、最後まで持続することで言葉を出すことが多くなるであろう。

【手だて1】お店屋さん「スーパーたんぼぼ」の場面設定

【結果】教室いっぱいにスーパーを再現することで喜んで買い物ができ、最後まで買い物を楽しむことが出来た。また野菜や果物、惣菜、ケーキ、お菓子や飲み物などお店の品物をたく



さん準備することで、品物と名前のマッチングができた。品物の名前を数多く言うことができ、かごに入らないぐらいの品物を買うことができた。

【考察】去年、生活科や図工の時間に作った品物に加え、新たに品物を数多く作ったことで、楽しそうに作る様子などから、大好きな食べ物ができる喜びを感じることができたと思われる。また、自分が作った品物がたくさん並べられていることで興味を持って、スムーズにお店屋さんごっこに入っていけたと考える。惣菜の寿司を作るときなど、おいしそうだねと声かけをすると食べる真似をするなど、ことばかけにすぐ反応することができた。品数が多かったので、ほしい物を主体的に選ぶことができ、ケーキ、お寿司、ピザ、りんご、みかん、だいこん、ゴーヤーなどの品物と名前のマッチングができた。

自分で食べたことのあるお菓子や作った物は、名前もよくわかっていた。いろいろな経験から言葉を習得していくと考えられる。

【手だて2】対応場面を多く作るため、担任が店員になり店員とお客の会話をさせる。

【結果】慣れた先生がエプロンを着て店員になっていたので抵抗無く買い物をすることができた。買うときの「～を下さい」、「いくらですか」という言葉を繰り返し使ったこ



とで、後半から一人で声を出せるようになっていった。

【考察】先生が、M君の目の高さで応対してくれたので安心して買い物をすることができた。子どものペースに合わせ、言葉が出てくるのをゆっくりと待つことは大事なことでと考える。お金の換算はできないので、品物はすべて百円とした。品物をとってすぐ百円を払おうとしたので、「ジュースください」、「いくらですか」をゆっくりと言わせてから品物を手渡すようにした。品物を多く買うことで、慣れてきて、品物を買うペースも早くなり、「～ください」とひとりでいえるようになっていた。品物の名前と「～をください」と言うのが精一杯であったが、今後の指導として、「おいしそうなケーキ」、「ゴーヤーはにががかな」など言葉を膨らませていきたいと考えている。

検証 2

視覚的に捉えやすい教材や、興味を示すおもちゃ(具体物)を工夫することによって、よりスムーズな発語に結びつくだろう。

【手だて 1】教室にある物に名札をつけたり、絵本や保健室や図書室、トイレなど写真カードや絵カードを提示する。



【結果】物には名前があることを、絵カードや文字で書いて目で見えて確かめられるようにしたので言葉の理解につながった。

【考察】五十音とカタカナを一部覚えているので、教室にある物、黒板、テレビ、ガラス、ドア、机、イス、ロッカーなどに名前を貼り付け、目で見えて言えるようにした。絵カードは、生活に結びついた食べ物（ピーマン、たまねぎ、なすなど）は比較的上手に言えたが、ランドセル、なべ、アイロンなどが言えなかった。これは、あまり聞き慣れていない言葉だと考えられる。また、何か行動を起こす時など、例えば「イスを持ってきます」と目を見ながら、ゆっくりと口形を意識して言うようにした。言葉を一つ一つ丁寧に、はっきりと言わせることは大事なことでと考える。また、○×ペープサートを使い、「お水は授業中は×、休み時間は○。」と言うように視覚的に良し悪しをはっきりさせた。絵カードや文字を見ることで言葉を少しずつ理解していると思われる。また、何回も何回も繰り返し、軽く肩をたたきながら

リズムに合わせて言わせることは発語を促すのに効果的だと考える。

【手だて 2】発語の手助けとしてパペット人形のエルモ君を使う。

【結果】人形のエルモ君は、M君がよく知っているキャラクターで、最初に見せた時すぐ「エルモ」と声に出しとびついた。人形を友達として同化し、エルモ君と一緒に楽しくお買い物



をすることができた。

【考察】友達のエルモ君のお誕生日のパーティーをしてあげようというストーリーを組み立て、お誕生パーティーに必要な品物を一緒に考え、買い物をするようになった。前時に遠足の買い物をしているので慣れた様子で好きな果物から買って行った。前回は品物の名前がなかなか出なくて、エルモ君がはじめの言葉をつぶやいたが、今回は自分から品物の名前を言うことができ、エルモ君が出てくる場面は少なくなった。前時の遠足の買い物の時、エルモ君にゴーヤを食べさせる場面があり、「にがいにがい、きらい」とエルモ君が反応したことをとても喜び、声に出して笑っていた。今回買い物が終わってから、思い出したように慌ててゴーヤを取りに行く場面も見られた。興味を持った人形などを活用し、話をさせる機会を数多く作ることで発語へとつながると考える。



検証 3

目で確かめ、耳で聞いて、声を出す、そして繰り返すという一連の過程をセットにすることにより、スムーズな発語に結びつくだろう。

【手だて】交流学級へ行く時は、交流学級の先生の顔写真カードを見せたり、移動の時などは体育館、運動場、図書館などの写真カードを見せる。

【結果】健康観察簿を持っていく時など、写真カードを見て「ほけんしつ」と言えるようになり、運動場の写真カードを見て体育着に着替えるという見通しを持った行動ができるようになった。

【考察】観察簿を持っていった保健室でクーラーが効いていて、思わず「すずしい」という言葉が出た。また、電気の消えたたんぼぼの教室に先生がいた時、入ってきたM君が「びっくりした！」と言う驚きの声をあげるなど、いろんな場面で自ら発する感情の言葉も徐々に出てきている。

買い物場面で、買いたい物をワークシートに書かせた時、誕生会のイラストから、ケーキという言葉がすぐに出たが、文字として書くことができなかった。そこで食べ物の絵本を見せたところ、絵本のケーキの絵を見ながらワークシートに「ケーキ」と書くことができた。実物や写真、絵で見る事で、視覚的に認知することができたと考える。おすし、ピザ、ゴーヤ、オレンジ、チョコレート、などは文字カードを見て書くことができ、書いた物を読むことができた。

9月になって、M君の発語の様子を発音チェック表でしらべた結果、一回目とあまり変わりはない。発音チェックの濁音を調べる時、発音チェック表を見ただけでは発語は難しいことがわかった。ホワイトボードに一語ずつ抜き出して書き、読んでもらおうとしたが読めなかった。そこで、ことばとしてりんご、ぞう、バナナと書くと、濁音も読むことができた。写真や絵カードなどを使って目で見て確かめ、文字と一致させ、耳を使って音で確かめ、言葉で言わせる。一連の流れを作ることで、言葉を理解し、言葉を自分のものとすることができると考える。さらに、定着させるためには繰り返し指導することが大事である。そうすると、よりスムーズな発語へと導くことができると考える。

研究の成果と課題

1 成果

- (1) 子どもが興味関心を持つような場面設定を工夫することで、持続して学習に取り組み、発語へと導くことができた。
- (2) 絵カードや写真カードなどの視覚的教材を作ったことで、子どもの言葉の理解や習得につながった。
- (3) 何度も繰り返すことで定着し、スムーズな発語へと結びつけることができた。

2 課題

- (1) 本学級の児童が今後さらに数多くの言葉を理解し、会話が二語文で話せるような指導方法の検討
- (2) 本学級の児童にわかりやすい視覚的教材を開発し、興味関心を持続させる授業内容の工夫。
- (3) 児童の長期的な目標を組み立て、系統的な指導方法の工夫。

《主な参考文献及び引用文献》

「自閉症児の特別支援 Q & A マニュアル」	廣瀬由美子，東條吉邦 加藤哲文	東京書籍	2004
「自閉症児（言語認知障害児）の発語プログラム」	石井聖	学苑社	2002
「ことばのストレッチ体操」	ことばのストレッチ研究会	明治図書	2006
「特別支援教育のための精神・神経医学」	杉山登志郎，原 仁	学習研究社	2003
「コミュニケーション障害とその援助」	井原栄二，菅原廣一 大石益男，肥後功一	明治図書	1991